

Contents

特集：レーガンが愛された理由	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”The man who beat communism” 「共産主義を倒した男」	8p
< From the Editor > 「アメリカのオプチミズム」	9p

特集：レーガンが愛された理由

6月6日から13日まで、米国に出張してきました。この1週間は、月末のイラク政権移譲期限を前に、「ブッシュ訪仏」「G8サミット」「国連の新決議」などの重要案件が予定されていた。重要な転機になるかもしれないこの時期に、ワシントン ニューヨーク シカゴと回って最新の情勢を見てこよう、というのが当初の思惑でした。

しかるにこの重要な1週間は、文字通り「レーガン追悼ウィーク」となりました。これほどまでに惜しまれる政治家は、近年では稀かもしれません。日本ではあまり注目されなかったようですが、ここからは米国社会の今日的な状況が読み取れると思います。

今週は、「レーガンはなぜ、愛されたか」を考えてみました。

驚くべきレーガン人気

どこの国でも高齢の重要人物に対しては、「予定稿」が用意されているものだ。つまり「いつ死なれてもいいように」当人の業績や人となりに対しては、新聞社でもテレビ局でもそれなりの叩き台が作ってある。それらは多かれ少なかれ、無味乾燥で中立的な内容となる。6月5日、第40代大統領ロナルド・レーガンが93歳の生涯を終えたときに、米国のメディアが一斉に報じた内容は多かれ少なかれ、「予定稿」的なものであったようだ。

しかし国民の反響が大きいことが分かるに従い、「レーガン追悼報道」は拡大と深化の途をたどる。次第に批判的なトーンは少なくなり、冷戦終結、経済の再生、米国の威信回復といったプラス面が前面に出るようになる。そして6月11日に行われたワシントン、国立礼拝堂での国葬の中継は、全米4000万人が視聴したという。

筆者の手元には、国葬が行われた6月11日付けのシカゴ・トリビューン紙がある。投書欄の中で、いくつか目立つものを取り上げてみよう。

- ・（手放しの礼賛）自分は貧乏人で、G Iとして得たお金で大学に通った。父は59歳になってようやく引退できた工場労働者で、家族はF D Rのことを「聖フランクリン」と呼んでいた。だが自分の経験から言えば、ロナルド・ウィルソン・レーガンこそが史上最高の大統領だ。
- ・（典型的なレーガン世代）1966年生まれの自分は、学校では米国の素晴らしさを学んだが、現実の米国はベトナム戦争やウォーターゲート事件、二桁インフレや大使館人質事件に苦しんでいた。ところが高校に入学した年にレーガンが大統領になり、彼の任期が終わる頃には2000万の雇用が生まれ、冷戦とソ連は終わりを迎えていた。レーガンだけがそれを予期していた。われわれの世代はレーガンのお陰で、教科書の中だけに存在した米国を信じることができた。
- ・（アンチ・ファンでも...）自分はレーガンの政策は嫌いだ、ナンシー夫人との何十年にもわたる夫婦愛をうらやましく思う。彼のように深い愛情はこんな時代にはめずらしい。自分は背が高くなりたいとか、金持ちになりたいとは思わないが、あんな関係が得られたらと思う。
- ・（現大統領との比較）現ブッシュ大統領と似ているといわれるが、大きな違いがある。レーガンは一発の銃弾を撃つこともなく、戦争に勝ってみせた。
- ・（こんな共和党員も...）レーガンは共和党とは何か、共和党に何を期待できるかを定義してくれた。以来、自分は熱心な共和党員である。次の選挙ではジョン・ケリーに投票するつもりだ。

そんなわけで、筆者は出張中、「レーガン追悼ウィーク」を体験することができた。とくに6月9日午後には遺体が到着したワシントンDCの熱狂振りにはちょっとしたものだった。呆れたことに、その日の午前の時点で、モールと呼ばれる市内の目抜き通りの露店では、早くも「レーガン追悼Tシャツ」を売っていたほどである¹。

この間、この1週間にあった様々な出来事 ノルマンジー上陸作戦60周年、ブッシュ訪仏、G 8サミット、国連安保理の新決議 などの重要案件はほとんどが霞んでしまった。アブグレイブ事件に関する続報で、普通であれば一面トップになっても不思議はないニュースも、目立たない扱いとなっていた。

そしてジョン・ケリー候補は、レーガンを追悼するコメントを発表すると同時に、選挙運動を1週間休止することを宣言した。この時期に何を言っても聞いてもらえないという現実的な判断といえるが、結果としてはブッシュ外交を批判する絶好の機会を見送った形となった。つまり大統領選挙の行方にも、一石を投じることになったのである。

これだけの社会現象になってしまうと、嫌でもその理由を考えざるを得ない。なぜ、レーガンはこれほどまでに惜しまれるのだろうか。

¹”In memory of President Ronald Reagan”という文字が入っている。「ホンジュラス製」とあるので、どう考えても生前に作ってあったとしか思えない。まあ、8ドルだったから許すけど。

愛された理由～ さまざまな事情

筆者も今回初めて知ったが、米国の歴代大統領は死ぬと必ず国葬になるのだそうだ。直近で亡くなったのは1994年のリチャード・ニクソン（37代）で、このときは辞任という特異なケースだったこともあって、国葬にはならなかった。

それ以前の国葬となると、一気に1973年のリンドン・ジョンソン（36代）までさかのぼってしまう²。米国民は「大統領の逝去に伴う国葬」というケースを、かくも長い間、体験していなかった。つまり、最初から盛り上がる素地があったわけである。

そして今日、存命の元大統領といえば、フォード91歳（38代）、カーター80歳（39代）、ブッシュ父80歳（41代）、クリントン57歳（42代）である。こう言っては語弊があるが、レーガン以外の誰が死んでも、それほど惜しいという気にはならないであろう。（余談ながら、米国大統領の年齢を調べると、1924年生まれのカーターとブッシュ父の後、一気に1946年生まれのクリントンと現ブッシュまで、文字通り一世代がぽっかりと空いている）。

多少の程度の差はあれ、レーガンを偉大な大統領と呼ぶことについては、ほぼ全米的なコンセンサスができている。1998年にはワシントン・ナショナル空港が「ロナルド・レーガン空港」に改名され、2001年にはニミッツ級航空母艦の9番艦が「ロナルド・レーガン」と命名された。米海軍の艦船に、生きている人物の名が使われることは滅多にないことである。

レーガンに対する一般的な評価としては、冷戦を勝利に導き、「小さな政府」で経済を再生した指導者であり、偉大なコミュニケーターでもあった、ということになる。1980年代は米国が安全保障と経済の両面からの困難から立ち直り、威信を回復した時期である。多くの米国民にとって、レーガン時代は甘美な思い出でもあるのだろう。レーガンの自信に満ちた態度や明るいユーモア、いかにも大統領らしい立派な体躯などが、古き良き時代に対する郷愁を誘うという面も、確かにあったはずである。

また、米国外交という面からいえば、レーガン時代は今日のネオコン（レーガナイト）たちのお手本でもある。最近旗色の悪いビル・クリストルも、自らのWeekly Standard誌で追悼文を寄稿し、「リベラルな多国間主義やキッシンジャー流の現実主義を取り除いてみると、米国の原則には信念が欠けていることに気づく。レーガン流の理念を重んじる政治家たるものは、今日のエスタブリッシュメントたちにありがちな、臆病な慢心や短期的視野に敢えて挑戦すべきである」といつもの持論をぶっている。

レーガン大統領は冷戦に勝利し、その結果として東欧は民主化した。ブッシュ大統領はテロとの戦いに勝利し、その結果として中東を民主化する、というのがネオコンたちの「悲願」である。が、その2つは果たして並列的なものかどうかは、例によって疑問である。

² ちなみに1972年にはハリー・トルーマン（33代）、1969年にはアイゼンハワー（34代）、1964年にはフーバー（31代）が亡くなっている。そして1963年のケネディ（35代）暗殺など、この時期の米国はしょっちゅう「大統領の死」を体験していたのである。

愛された理由～ きれいな晩節

こうした表面的な理由だけではなく、あらためて「なぜレーガンは人気があるのか」を考えてみると、「辞めてから人気が出た」ことも見逃せないようである。ギャラップの調査³によると、レーガンの在任中の平均支持率は53%であった。これはカーター（45%）やフォード（47%）よりは高いが、クリントン（55%）やブッシュ父（64%）よりも低い。つまり在任中の人気は普通程度であった。

ところがレーガン人気は、90年代になってから急上昇するのである。すなわち54%（1990年） 50%（1992年） 52%（1993年） 71%（1999年） 66%（2000年） 73%（2002年）と推移する。どこに断層があったかといえ、おそらくは1994年11月、国民に向かってアルツハイマー病を公表した時点であろう。レーガンは手紙の中で、「私は人生のたそがれへと向かう旅路に就く。アメリカは常に輝かしい夜明けを迎えるだろう。友人たちよ、ありがとう」と告げる。

その後のレーガンは、自宅で療養生活を送った。それから実に10年。レーガンは、生臭い政治家としての過去から自由になった。実際、偉大な人物が偉大なままで生涯を終えるのは容易なことではない。すでに引退をしたはずの人が、「夢よもう一度」とばかりに余計なことに挑戦し、自らの生涯への評価を台無しにしてしまうケースは余りにも多い。レーガンの場合は、その可能性は病気によって未然に摘み取られていたのである。

かくしてレーガンは晩節を汚すことなく、静かな余生を送り、なおかつ十分に長生きした。2001年に転倒してからは寝たきりとなり、最後は肺炎のため、93歳で大往生を遂げた。こうなると、彼の成し遂げた仕事の是非などは、相対的に小さな問題となる。「あの人は昔はすごかった」という記憶だけが残る。米国民のレーガンへの思いは、10年かけて純化され、美化されてきたのである。

また、アルツハイマー病との戦いは、ナンシー夫人との夫婦愛の物語でもあった。当のレーガン夫妻にとっては、悲劇以外の何ものでもなかったはずだが、これは高齢化社会の入り口まで来ている今の米国においては、誰もが無関心でいられない状況である。そして離婚率が高い米国社会においては、ナンシー夫人の献身は単なる美談を越えて、万人の心を打つエピソードとっていいかもしれない。

国葬に至る一連のセレモニーでは、ナンシー夫人の気丈な姿が注目を集めた。特に11日の夕刻、カリフォルニアに戻ってきた遺体は、遺言どおり日没と共に埋葬されたのだが、その直前、棺に額をつけたナンシー夫人の映像は、おそらく多くの人にとって、忘れがたいシーンとなったのではないだろうか。元俳優の大統領の死は、とにかく感動的な多くのドラマを残したのである。

³ Ronald Reagan From the People's Perspective: A Gallup Poll Review (6月7日) <http://www.gallup.com/content/?ci=11887>

愛された理由～ 社会の保守化

亡き大統領への評価をめぐって、不思議と聞くことが少なかったのが「組合潰し」の話である。1981年、レーガンは職場復帰命令を無視した1万1359人の航空管制官を全員解雇した。当時としては衝撃的な決定であり、レーガン時代を象徴するエピソードのひとつである。

この事件を「時代の先取り」と見るか、「貧富の差を拡大した階級闘争の始まり」と見るかは意見が分かれるところだろう。が、なぜ同じことを今では「当たり前」と感じるかといえば、米国において製造業が衰退し、サービス業への転換が進んだことで、労働組合の組織化率自体が低下したためだろう。つまり産業構造の転換が進んだため、労働組合の社会的地位が低下したのである。

この間に米国社会で増えたのが、プロフェッショナルなサービスを提供する個人事業主である。「フォーチュン500」に数えられるような従来型の大企業は、90年代を通してほとんど雇用を増やしていない。過去20年ほどの米国で、雇用を増やしたのは主に中小・零細企業であり、NGOである。

今回の出張中、ワシントンで情報関連の仕事をしている人から、「独立してみると分かるんだけど、この国の税金は結構、高いのだよ」という話を聞いた。連邦税に地方税、そのほかいろんな名目の税金を積み上げていくと、額も高い上に手続きも煩雑で、嫌でも税金に関心を持たざるを得なくなるという。なるほど、これでは「小さな政府」論者が増えるのも道理である。

つまり、ここ10年ほどの米国社会の保守化という現象の陰には、「民主党の支持基盤である労働組合の衰退と、共和党の支持基盤である中小・零細企業の経営者の増加」という社会的な構造変化があったのだろう。

米国民の政治的立場（ギャラップ）

	Conservative	Moderate	Liberal
2003 Oct/Nov	41	39	19
2002 Oct	38	39	19
2001 Oct	38	40	19
2000 Oct	37	42	20

そのように考えると、ブッシュ減税に対する評価が高いのも納得が行く⁴。米国社会は大組織から小組織へ、他律から自律へ、社会福祉からオーナーシップ重視へと転換してきた。その結果が、社会全体の保守化現象なのであろう。こうしてみると、レーガンはやはり時代を先取りしていたし、今日、高い評価を受ける理由の一端がここにあるといえる。

⁴ ケリー上院議員も、高額所得層以外に対する減税はそのまま恒久化することを提案している。

愛された理由～ 寛容性

レーガンが盛んに語られる際のひとつの論点として、現ブッシュ大統領との比較がある。さまざまな評価ができるところだが、ここは我田引水で拙著、『アメリカの論理』の最後の部分をあらためてご紹介させてもらおう。

ブッシュ政権で大きく右に振れた振り子は、いつ戻るのか。そしてブッシュ政権はこれからどうなるのか。ここで答えを出すことはできないが、ひとつの補助線を引いてみよう。

その人をもっともよく知るのは、その人のライバルであるといわれる。ブッシュの最大のライバルは、二〇〇〇年選挙で激しく戦ったアル・ゴア前副大統領であろう。二〇〇二年一月二日、ゴアはワシントンDCのブルッキングス研究所で講演を行っている。このブッシュ批判が面白い。

私は大統領が信念を捨てろと言うのではない。彼の信念を、アメリカ人が直面している現実と和解させるべきだと言うのである。彼のヒーローであるロナルド・レーガンが、一九八二年の中間選挙前にやったようにしてほしいのだ。

レーガンは議会指導者と超党派で経済政策を協議した。私はレーガン大統領の信念には賛成しなかったし、議員としては彼の経済政策に反対票を投じた。一九八二年の政策の結果についても賛同はしない。それでも私は、レーガン大統領が現実を認識し、自分と違う考え方の持ち主と真摯な会話を持つようとしたことを尊敬している。

レーガンとブッシュの政治スタイルはどこが違うのか。レーガンは大風呂敷で、何でもかんでも自分の味方に引き入れてしまうような懐の深さがあった。ブッシュは自分の考えに近い人だけを大事にして、味方を固めて敵を罵倒し、最後は「一票差でも勝ち」は勝ちといったところがある。レーガンは敵を作らなかったが、ブッシュは敵を作る。左派が、反グローバル派が、イスラム教徒が、平和主義者がブッシュを嫌っている。いっぺん嫌いになった人は、なかなか考えを変えない。この政治スタイルはいつかかならず限界に行き当たるだろう。

今日の米国社会は、「保守とリベラル」「ブッシュ支持と反ブッシュ」「レッドステーツとブルーステーツ」にくっきりと割れてしまっている。そんな不寛容な今日から見ると、楽天的で寛容だったレーガン時代が懐かしく思えるのは自然なことかもしれない。

レーガンはブッシュと同様な「草の根保守派」であったが、政治手法の懐が深かった。対ソ強硬姿勢を見せつつ、ゴルバチョフとの友情を深めた。大減税を行ったが、同時にループ・ホール（税の抜け穴）をふさいだ。「家族の価値」を強調したが、中絶問題などでは現状を維持した。要するに、リベラル派が安心できる保守派大統領だったのである。現ブッシュ大統領と比較すると、ますますレーガンが惜しまれる気持ちが分かるというものだ。

大統領選挙の最新情勢

さて、最後に直近の大統領選挙の展開について。

目下の米大統領選挙は、全国向けの世論調査でも、各州ごとの票読みにおいても、ほとんど拮抗した状況である。ワシントンで会った政治アナリストたちも、現時点では何もはっきりしたことは言えない、といった印象が強い。6月3-5日分のギャラップ社調査によれば、ブッシュ政権への支持率も49%対49%で見事に割れている。つまり予想される条件だけを比べるとほとんどイーブン、ということになる。

こうなると、今後は「予想されてないこと」が持つ意味が大きくなる。今回の「レーガン追悼ウィーク」のようなハプニングが、どちらの候補を利するかが注目点になる。

レーガンの死は、どちらかといえばブッシュにとって有利な状況を生み出した。国葬による厳粛ムードは現職への支持の追い風になるし、国葬でナンシー夫人をエスコートした映像はブッシュの好感度を上げたはずである。他方、ケリーは選挙戦を1週間中止し、「突っ込みどころ満載」の1週間を無為に過ごしてしまった。この辺は「運・不運」の問題だが、そのくらい紙一重の勝負になっているといえよう。

次に来そうなハプニングとしては、6月22日に刊行されるクリントン前大統領の自叙伝『マイ・ライフ』への反響がある。すでに全米の書店にはポスターが貼られているが、ヒラリー夫人の『リビング・ヒストリー』同様、大いに話題を振りまくことになるだろう。今後しばらくはクリントンの言動が要注意といえよう。

7月28-30日に予定されている民主党大会を控え、ケリー陣営では副大統領候補の発表が秒読み段階になっている。先週後半、ジョン・マケイン上院議員が、副大統領候補への打診を正式に断ったというニュースが報じられた。共和党のマケイン議員が民主党の副大統領候補になることは常識的には考えにくいのだが、ケリー陣営としては超党派で人気のあるマケインを、という「ウルトラC」の可能性を最終段階まで模索した模様である。現時点で残った候補者の「ショート・リスト」には、当初から名が挙がっていたエドワーズ上院議員、クラーク元将軍、ゲッパート下院議員などが残っているらしい。いずれにせよ副大統領候補の発表は、ギリギリのタイミングになりそうだ。

全体にケリー陣営はちぐはぐな動きが目立つ。イラク問題でも経済問題でも、いまひとつ政策面の主張が聞こえてこない。もっとも民主党の内部には、「今の時期はとにかく顔売ってだけでいい。現職が失策をしているときは、対抗馬は何もしなくても支持は上昇する」という現実論もある。下手に政策論争を仕掛けると、身内の意見の分裂が目立ったりするので、今の段階では「イメージ選挙」で十分だということである。

逆にいえば、ブッシュ最大の敵はケリーではなくて、ブッシュ自身にあり、ということになる。意外性のない結論、といえはまさにその通りなのだが。

< 今週の”The Economist”誌から >

”The man who beat communism”

Cover Story

「共産主義を倒した男」

June 12th 2004

* 昼寝を愛する知的ならざる男が、なぜあれだけの仕事をなしえたか。 ”The Economist”誌のレーガン評は、英国から見た米国文明論にもなっているようです。

< 要旨 >

冷戦の真っ只中、経済は停滞した80年代初頭、合衆国大統領の適任者ではなかった。今週、昇天したロナルド・レーガンは、笑顔で認めただろう。大統領就任は70歳目前であり、閣議ではときに眠そうに見えた。議論を避けようとした。彼は知的な人間ではなかったのだ。

しかしレーガン政権の81～89年は世界を変えた。米国主導の連合国は冷戦に勝利した。レーガンは共産主義を打破し、史上最も残酷な世紀を終わらせ、戦争のない世界への扉を開いた。外交では20世紀の米大統領のうち、最も有能だった大統領の1人といえる。

1980年の時点では、誰もが予想できなかった。60年代から70年代にかけて、共産主義は反撃に転じていた。プラハの春を踏み潰し、西欧を米国の核の傘から引き剥がそうとした。北ベトナム軍は人々が望まぬ独裁政権を押し付け、ソ連軍は中東やアフリカで忙しかった。

レーガンは政権に就き、米国は善、ソ連は悪との信念を明らかにした。勢力均衡策などは道徳的に間違っており、ソ連の軍事力には経済力の裏づけがないと断じた。ゆえにレーガンは防衛力を増強した。欧州に中距離核ミサイルを配備した。米国がしっかりソ連に立ち向かえば、勝ると踏んだのだ。彼は正しかった。ロシア人は東欧を失い、共産主義を放棄した。

もちろんレーガン外交は完璧でなかった。キューバを無視し、中国に手をこまねき、中東和平には何もしなかった。ゴルバチョフに無用な妥協をしかけた。最悪はイラン コントラ事件である。また、レーガンがいなくとも、少数がすべてを支配する共産主義というシステムは、遅かれ早かれ壁にぶち当たっただろう。が、レーガンは死期を早めた。彼は米国経済を再び成長させ、ソ連が張り合えないことを分かせた。

なぜ彼にはこんなことができたのか。米国人だったからである。無頓着で、希望的で、必要となれば強硬になれる。スピーチライターが書いた言葉も、彼の口からはよどみなく流れた。そして何よりも彼には「ガッツがあった」のである。レーガンは米国の力を信じていた。軍事力だけでなく、経済力、さらに人々の気持ちを。

欧州における帝国では、兵士や判事や収税人が派遣されて離れた人々を支配した。冷戦終了後の世界で、レーガンは離れた人々が自らの統治を選べるよう、米国のパワーが使われることを望んだ。そうすれば民主化の道を選ぶだろうと思ったのである。

彼ならば今週、国連が下した決定に安心しただろう。イラク戦争には不安を感じ、欧州人をどやしつける代わりに、なだめすかしただろう。そして同時に、レーガンならばサダム以後のイラクが新たに民主化することを望んだはずである。

< From the Editor > アメリカのオプチミズム

亡きロナルド・レーガン氏の偉大な美德として、誰もが挙げるのが「オプチミズムの人」という評価です。どうやらOptimismには、日本語の「楽観主義」という訳を超えた意味が盛り込まれているようです。それはつまり、「たとえ今は苦しくても、明るい未来を描く意志の力」といったニュアンスなのでしょう。

さて、分かりやすいオプチミズムの例はないだろうか。考えているうちに思い出したのは、1980年代にウォール・ストリート・ジャーナル紙に掲載された、ユナイテッド・テクノロジー社による”Gray Matter”と呼ばれる連載企業広告です。日本では『アメリカの心』（学生社）という本で紹介されていますが、アメリカ人の前向きな精神を紹介するときに、これに勝る材料はないと思います。

以下はまったくの一例です。

「失敗を恐れるな」

君はこれまでに / 何度も失敗した。
きっと覚えては / いないだろうが。
はじめて / 歩こうとしたあの時 / 君は転んでしまった。
はじめて / 泳ごうとしたあの時 / 君はおぼれそうになった、 / そうじゃなかったかい？
はじめて / バットを振ったとき / バットはボールに当たったかい？
強打者たち、 / ホームランを一番よく打つ / ヒッターは、 / よく三振も / するものだ。
R・H・メーシーは / 7回も / 失敗した後で / ようやくニューヨークの店を / 成功させた
英国の小説家 / ジョン・クリーゼーは / 564冊の本を / 出版する前に
753通の断り状を受け取った。
ベープ・ルースは / 1330回三振した、 / だが714本のホームランも / かつとばしている。
失敗を / 恐れちゃいけない。
トライもしないで / 逃す / チャンスこそ / 怖れた方がいい

1981年10月に掲載されたこのメッセージには、36,158通の手紙が寄せられ、123,641枚のリプリントが発送されました。レーガン時代に書かれたこれらの文章には、いかにもレーガンが口にしような、前向きな強い意志が込められているように思うのです。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1 <http://www.niri.co.jp>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-2183

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com